共創プラットフォーム「こまつリビングラボ」
運営スキーム構築業務報告書

令和８年３月

小　松　市

株式会社こまつ賑わいセンター

目次

はじめに……1
第１章　業務の背景及び目的……2
１－1. 業務の背景……2
１－2. 業務の目的……2
第２章　共創プロジェクトの構想……4
２－1. 共創分野の整理と基本的な考え方……4
２－2. 共創分野のビジョン……5
２－3. 共創プロジェクトの構成と設計……6
２－4. 運営体制の考え方……12
第３章　共創プロジェクトの実践……18
３－1. 実践の位置付け……18
３－2. 対話の場の設計の考え方……18
３－3. 対話の実施概要……19
３－4. 実践から得られた成果と気づき……25
第４章　情報発信……27
４－1. 情報発信の目的……27
４－2. 発信内容と手法……27
４－3. 今後を見据えた情報発信の課題と対応の方向性……30
第５章　今後の展開方針……32
５－1. 2030 年開館までの全体展開シナリオ……32
５－2. エリア特性を踏まえた共創プロジェクトの展開方針……33
５－3. 二拠点型リビングラボ運営スキームの構築……34
５－4. 段階的な人材・組織体制の強化方針……35
５－5. 持続的な運営に向けた課題と対応の方向性（総括）……36
５－6. 今後のアクション（次年度以降）……37

はじめに

- この報告書は、2030（令和 12）年に開館を予定している小松市未来型図書館等複合施設（以下、特に断りのない限り「未来型図書館」という。）を核として展開される、共創プラットフォーム「こまつリビングラボ」の持続可能な運営スキームについて整理したものです。
- 未来型図書館の整備は、単なる公共施設の建設にとどまらず、市民、事業者、大学、行政等が協働し、公共を共に支え育てていく新しい仕組みを構築すること、あわせて、小松駅周辺のまちなか全体の価値向上や、次世代に向けた地域の基盤づくりへとつなげていくことを目的としています。
- 「こまつリビングラボ」は、こうした考えのもと、多様な主体が対話と実践を通じて関係性や知見を蓄積し、新たな価値を共に創出していく共創の場として位置付けられています。
- 本報告書では、株式会社こまつ賑わいセンターが中心となって進めてきた検討及び実践を踏まえ、未来型図書館の開館前の段階から共創の取組を社会実装していくための運営スキームを整理し、小松駅周辺と芦城公園周辺の二拠点が連携する形で、まち全体に共創の活動が循環していく基盤を構築することを最終目的としています。

第１章　業務の背景及び目的

１－1. 業務の背景

- 小松市では、令和 3 年度より対話を重視した共創のプロセスを通じて、未来型図書館の整備に向けた検討を進めています。令和 5 年度には、市民、事業者、大学、行政等が参画する対話と活動の場として、「こまつリビングラボ」を立ち上げ、施設機能の具体化や建築空間イメージづくりなどを実践的に行い、その成果を令和 6 年度策定の未来型図書館等複合施設基本計画に反映しています。
- 同基本計画において、こまつリビングラボは「人・情報・活動をつなぐ共創の場」として、未来型図書館の主要な機能の一つに位置付けられています。また、芦城公園エリアに立地する未来型図書館を起点に、小松駅周辺へと広がるまちなか全体において、人の流れや回遊性を高め、エリア価値の向上に寄与する共創プラットフォームへと発展していくことが期待されています。
- 一方で、こうした共創の取組みを一過性のものに終わらせず、将来にわたり継続的な活動として定着させていくためには、未来型図書館の開館を待つことなく、開館前段階から運営体制を構築し、運営ノウハウを蓄積していくことが重要です。
- このような背景の中、小松市や小松商工会議所、市内企業等が出資する㈱こまつ賑わいセンターは、行政を補完する立場から官民連携を促進し、地域再生に取り組む都市再生推進法人として、令和 4 年 3 月に当市より指定を受けています。
- 今後は、その役割をより明確にし、「まちづくりのコーディネーター」「まちづくり活動の推進主体」として、共創プラットフォーム・マネジメントを新たな事業方針の一つとして位置付け、事業展開していくこととしています。
- これらを踏まえ、未来型図書館等複合施設整備・運営事業募集要項（令和 7 年 12 月 23 日公表）における「こまつリビングラボ連携業務に関する要求水準」では、㈱こまつ賑わいセンターがリビングラボの運営の中心的組織として、その活動をけん引し、関係主体をつなぎながらプロジェクト推進を図る役割を担うことが示されています。
- 以上の背景から、㈱こまつ賑わいセンターが都市再生推進法人としての特性を活かしつつ、行政の補完的立場で共創プラットフォームの中核を担っていくためには、将来を見据えた持続可能な運営スキームの構築が求められています。

１－2. 業務の目的

- 本業務は、未来型図書館の開館（2030 年予定）を見据え、未来型図書館の主要な機能の一つである「こまつリビングラボ」が、将来にわたり持続的に機能することを目的に実施したものです。
- 特に、開館前の段階から共創の仕組みを社会実装し、運営体制、運営ノウハウ、関係主体間の信頼関係やネットワークを段階的に蓄積していくことを重視しています。

- こまつリビングラボは、市民、事業者、大学、行政等の多様な主体が継続的に関わり合いながら、対話と実践を通じて、関係性と知見を育てていく共創の場です。
- 本業務においては、その活動を支える運営基盤を構築することを主要な成果として位置付けています。
- 本報告書は、共創プラットフォーム「こまつリビングラボ」運営スキーム構築業務において実施した検討プロセス及び実践内容を整理するとともに、そこから得られた知見を踏まえ、今後の展開方針を示すものです。

第２章　共創プロジェクトの構想

２－1. 共創分野の整理と基本的な考え方

- こまつリビングラボにおける共創プロジェクトの構想にあたっては、初めに、どのような分野を共創の対象として位置付けるかについて整理を行いました。
- その際、共創分野を単なる行政施策や既存事業の延長として捉えるのではなく、市民、事業者、大学、行政等の多様な主体が対話を通じて関係性を築き、試行錯誤を重ねながら新たな価値を生み出していく余地のある領域として設定することを重視しました。
- 未来型図書館等複合施設基本計画において、こまつリビングラボは「人・情報・活動をつなぐ共創の場」として位置付けられています。このため、本業務においても、行政課題を起点としつつも、あらかじめ解決策や結論を定めるものではなく、対話と活動のプロセスそのものが価値となる共創分野を設定することを基本的な考えとしました。
- また、共創の取組を未来型図書館の施設内部で完結する取組とするのではなく、芦城公園周辺から小松駅周辺へと広がるまちなかを含めた、空間的・社会的広がりを持たせることを前提としています。
- これらを踏まえ、以下の観点から3つの共創分野を整理し、設定しました。
  - **未来型図書館づくり**
    未来型図書館の多面的な機能を活かし、地域や社会への参加支援、多彩な体験や活動の創出、未来を担う人材育成など、複合施設の整備・運営と密接に関わる分野
  - **小松駅周辺のまちなか再生**
    まちなかの賑わいづくりやコミュニティづくり、情報発信等を通じて、エリア価値の向上に波及する分野
  - **産官学・市民協働による新しい公共のあり方**
    行政、市民、事業者、大学等の多様な主体が関与し得る、公共の担い方や考え方そのものを問い直す分野

- なお、これらの分野は固定的な区分ではなく、今後の社会状況や参加主体の関心の変化に応じて、分野横断的な取組や再編・拡張を行っていくことを前提としています。

2－2. 共創分野のビジョン

① 未来型図書館づくりにおける共創ビジョン

- 未来型図書館づくりにおける共創ビジョンは、「利用者・市民と共に創り、育ち続ける公共施設を実現する」ことです。
- 未来型図書館は、単に本や情報を提供する施設ではなく、市民の学び、交流、活動を支え、人生の様々な段階に寄り添う拠点として計画されています。その実現にあたっては、設計・建設・運営の各段階において、市や事業者だけでなく、実際に利用する市民や関係者の視点を継続的に取り入れていくことが重要です。
- こまつリビングラボは、こうした視点を具体化するための対話と試行の場として機能し、
  - どのような過ごし方や活動が求められているのか
  - 機能や空間がどのように使われ、どのように育っていくべきか
  - 開館後、どのような人材や仕組みが施設を支えるのか

  といった問いを、市民と共に考え、形にしていく役割を担います。
- また、PFI 手法による施設の整備・運営を前提とする中で、SPC（特別目的会社）や運営事業者と市民との間に立ち、利用者の声や実践から得られる知見を施設運営へと橋渡しする媒介的な機能を果たすことも重要な役割です。
- この分野における共創ビジョンは、未来型図書館を「完成して終わる施設」とするのではなく、開館後もリビングラボを通じて不断に更新され、市民と共に価値を高め続ける公共施設として育てていくことを目指すものです。

② 小松駅周辺のまちなか再生における共創ビジョン

- 小松駅周辺のまちなか再生における共創ビジョンは、「未来型図書館を起点に、人の流れと活動が連鎖するまちなかの再生モデルを創出する」ことです。
- 北陸新幹線小松駅の開業を契機に、小松駅周辺では新たな人流や都市機能の集積が進みつつある一方、公共空間や既存ストックの活用、エリア全体としての回遊性や滞在価値の向上が重要な課題となっています。
- こまつリビングラボは、こうした課題に対し、行政計画や整備事業だけでは捉えきれない生活者・利用者視点からの問いを立ち上げる場として機能します。
- 未来型図書館や芦城公園を起点に、小松駅周辺の公共施設や駅前広場、商店街や民間施設などと連動しながら、
  - まちなかに求められる活動や滞在の質とは何か

・　公共空間と民間空間がどのように補完し合えるのか
・　小さな実験や社会実験をどのように積み重ねていくのか

といったテーマについて、多様な主体と共に対話と実践を重ねていきます。

- この分野におけるリビングラボの役割は、事業を直接実施する主体となることではなく、人・アイデア・活動をつなぎ、実験や試行が生まれやすい環境を整えることにあります。
- 小さな試行を通じて得られた知見を共有・蓄積し、将来的には行政施策や民間投資、エリアマネジメントへと接続することで、持続的なまちなか再生の基盤形成を図ります。
- この共創ビジョンは、未来型図書館を「まちに閉じた拠点」ではなく、まちなかへ価値を波及させるエンジンとして機能させることを目指すものです。

③　産官学・市民協働による新しい公共のあり方に関する共創ビジョン

- 産官学・市民協働による新しい公共のあり方に関する共創ビジョンは、「多様な主体が役割を持ち寄り、共に公共を支え、創り続ける仕組みを小松市に根付かせる」ことです。
- 少子高齢化や社会課題の複雑化が進む中、行政単独で公共サービスやまちづくりを担い続けることには限界があり、市民、事業者、大学などがそれぞれの知見や資源を持ち寄る「協働型の公共」への転換が求められています。
- こまつリビングラボは、こうした転換を支えるための実践的なプラットフォームとして、
  ・　立場や肩書を超えて対話できる場
  ・　小さく試し、失敗も含めて学べる場
  ・　公共と民間の間を行き来できる中間的な場

  を提供します。
- この分野においては、共創そのものを目的とするのではなく、共創を通じて人材が育ち、関係性が蓄積され、新たなプロジェクトや担い手が生まれる循環を生み出すことを重視します。
- 最終的には、未来型図書館及びこまつリビングラボを核として、「共創すること」が特別な取組ではなく、小松市における公共の自然なあり方として定着している状態を実現することです。
- その結果として、共創が小松市のアイデンティティの一つとなり、次世代へと受け継がれていくことを目指します。

2－3. 共創プロジェクトの構成と設計

- こまつリビングラボにおける共創プロジェクトは、前節で整理した各共創分野のビジョンを具体化し、対話から実践、さらに次の展開へとつなげていくための中核的な取組として位置付けられます。

- 本業務では、共創プロジェクトを単発のイベントや事業として捉えるのではなく、各共創分野ごとに複数のプロジェクトが並行的または段階的に展開される「プロジェクト群（ポートフォリオ）」として構成・設計することを基本的な考えとしました。
- これは、共創の取組みが、
  - 分野ごとに異なる熟成度や時間軸を持つこと
  - 参加主体や関与の仕方が多様であること
  - 試行と検証を繰り返しながら発展していく性質を持つこと

  といった特性を有していることを踏まえたものです。

A）共創プロジェクトの構成と基本的な考え方

- 共創プロジェクトの構成にあたっては、以下の考え方を重視しました。

① 分野別に複数のプロジェクトを持つ構成

- 各共創分野において、単一のプロジェクトに集約するのではなく、テーマや関心の異なる複数のプロジェクトが同時に存在し得る構成とします。
- これにより、参加者は自らの関心や関われる範囲に応じてプロジェクトを選択することが可能となり、共創への関与のハードルを下げる効果が期待されます。

② 並行展開と段階的展開の併存

- 共創プロジェクトには、
  - 同時並行で展開されるもの
  - 対話→試行→発展といった段階を踏んで展開されるもの

  が混在することを前提としています。
- すべてのプロジェクトが同じスピードや到達点を目指すのではなく、状況に応じて自然に収束・発展・派生していく柔軟性を持たせることを重視します。

③ 成果の多様性を前提とした評価

- 共創プロジェクトの成果を、制度化や事業化に直結するもののみに限定するのではなく、
  - 考え方や視点の共有
  - ネットワークや関係性の形成
  - 次の問いやプロジェクトの創出

といった成果も、共創の正当な成果として位置付けます。

B）共創プロジェクトの基本構成要素

- 各共創プロジェクトは、原則として以下の要素を持つものとして設計します。
  - **プロジェクトの趣旨・問い**
    各共創分野のビジョンとの関係性を整理したテーマや問い
  - **主な参加主体**
    市民、事業者、大学、行政等の関与を想定
  - **活動の形態**
    対話、ワークショップ、試行的実践、社会実験等、プロジェクトの性格に応じて柔軟に設定
  - **想定される成果の形**
    記録、提案、実践事例、運営への反映、次段階への接続など、多様な形を想定
- これにより、各プロジェクトの性格や役割が可視化され、運営側及び参加者双方にとって理解しやすい構成となることを目指します。

C）共創分野別の具体的プロジェクト例

- こまつリビングラボでは、前節で整理した3つの共創分野ごとに、既に実施している取組に加え、今後の展開を見据えた複数の共創プロジェクトを段階的かつ柔軟に展開していくことを想定しています。
- 以下では、代表的なプロジェクト例について、その趣旨、内容、想定される効果等を整理します。なお、各プロジェクトは、実施内容や成熟度に応じて内容の更新や再編を行うことを前提としています。

① 未来型図書館づくりに関する共創プロジェクト

- **「Wall of Wishes」フェンスアートプロジェクト**

- 本プロジェクトは、未来型図書館の建設予定地を囲う仮設フェンスを「未来へのキャンバス」として捉え、“これまでの記憶とこれからの希望を描く”ことを目的に市民参加型のアートワークショップを展開するものです。

- 市民が、未来型図書館で「やってみたいこと」「あったらよいと感じること」などの想いを言葉やビジュアルとして自由に表現・共有する機会を設けることで、開館前から「自分たちで育てる公共施設」という意識の醸成を図ります。
- 本プロジェクトで可視化された市民の想いや問いは、単なる表現活動にとどまらず、未来型図書館の空間づくりやサービス設計、運営の検討における重要なインプットとして位置付けます。
- 完成したフェンスアートは、写真・映像等により記録・保存し、未来型図書館開館時の展示や広報、SNS 等での情報発信に活用することで、プロセスそのものを共有可能な資産として蓄積していきます。

● **未来型図書館の使い方プロトタイピング**

- 本プロジェクトは、未来型図書館の設計内容や想定される機能を前提として、実際の利用シーンを市民と共に具体化・検証することを目的としています。
- 施設の平面図面やゾーニング、動線計画、サービス構成等を素材に、図面や模型、仮想空間、既存施設等を活用しながら、「どのような人が、どのような目的で、どのように過ごすのか」といった利用の具体像を市民の視点から試行的に検討します。

- 学生、子育て世代、高齢者、事業者など、多様な利用主体の視点を取り入れることで、使い勝手や居心地、活動の生まれ方に関する気づきを蓄積し、施設運営やサービス設計への反映を図ります。
- また、PFI 手法による運営を見据え、SPC や運営事業者と連携しながら、利用者視点から得られた知見を橋渡しすることで、期間前から「使い方を共に考え、育てる」という意識を醸成するとともに、開館後の運営に資する実践的な検討プロセスとします。

● **テーマ配架・本棚づくりプロジェクト**

- 本プロジェクトは、未来型図書館の蔵書構成や空間づくりについて、市民参加型で

検討する取組です。

- 市民の暮らしや地域の特性、社会課題等を起点にテーマを設定し、そのテーマに基づいて本棚の構成やストーリーを考えます。選書にあたっては、図書館司書の専門性を尊重しつつ、市民による意見交換や公開選書の機会を取り入れ、「知を編集するプロセス」を可視化します。
- 単なる配架作業にとどまらず、「なぜ、この本をこの場所に置くのか」「このテーマは誰に向けたものか」といった問いを共有しながら、本棚そのものを一つのメディアとして捉えることを重視します。
- 本取組を通じて、市民が未来型図書館の担い手として関わる機会を創出するとともに、開館後も更新され続ける柔軟なコレクション運営の基盤形成を目指します。

● **コレクションハブの企画・運営プロジェクト**

- 未来型図書館における「コレクションハブ」は、図書や資料に限らず、人や活動、記録、地域資源をつなぐ拠点として計画されています。
- 本プロジェクトでは、地域に点在する個人・団体・企業・大学等が有する知見、アーカイブ、活動記録、研究成果、作品等を持ち寄り、共有・編集・発信する仕組みについて、市民と共に検討します。
- 地域の歴史資料、産業やものづくりの記録、市民活動の成果、研究成果等をテーマ別に整理し、展示やデジタルアーカイブとして公開することが想定されます。
- コレクションハブは、単なる保存を目的とする場ではなく、対話や学び、新たな活動の起点となる「生きた知の拠点」として機能することを目指します。
- 運営にあたっては、市民、専門家、大学、事業者等が役割を分担しながら関与する体制を検討し、持続的な更新・活用が可能な仕組みづくりを行います。

● **ライブラリー・アクティビティ共創プログラム**

- 本プロジェクトは、未来型図書館の空間で生まれる学びや交流、創作活動を、市民と共に企画・運営する取組です。
- ワークショップや読書会、展示、トークイベント等を通じて、「本」や「知」を起点とした多様な活動のあり方を試行します。
- 本取組を通じて、未来型図書館が日常的に活動の生まれ、人が関わり続ける場となることを目指します。

② 小松駅周辺のまちなか再生に関する共創プロジェクト

● **みんなのガクショクプロジェクト**

- 本プロジェクトは、㈱こまつ賑わいセンターが賃貸借事業を行っている小松駅前「こまつアズスクエア」1階テナント跡地を活用し、「学び」と「食」を軸とした共創拠点「みんなのガクショク」を開設・運営する取組です。
- 学生、事業者、行政、地域が交わる場として、オープンキャンパスラウンジ機能を持

たせることで、まちなかにおける新たな交流と滞在の拠点形成を図ります。

・ 本プロジェクトでは、空間構成やその場で展開されるプログラムの内容について、まちなか全体への波及効果を意識しながら検討・運営を行い、将来的なエリアマネジメントや民間事業展開への示唆を得ることを目的とします。

- **まちなか交流・滞在案内プロジェクト**
  - 本プロジェクトは、ビジネス来訪者や企業研修参加者、観光客等の増加を背景に、夜間の時間帯を含めた小松駅周辺での過ごし方を一体的に案内し、滞在の質と回遊性の向上を図ることを目的とします。
  - ㈱こまつ賑わいセンターが中心となり、飲食店、宿泊施設、体験事業者、研修受入企業等と連携しながら、「どのような来訪者が訪れているのか」「どのような情報や案内が求められているのか」を持ち寄り、共に整理・更新していきます。
  - 情報を「集める」こと自体ではなく、継続的に更新・運用する仕組みづくりを重視し、実践を通じて持続可能な案内モデルの構築を目指します。

③ 産官学・市民協働による新しい公共のあり方に関する共創プロジェクト

- **公共・民間 共創デザイン・ラボ**
  - 本プロジェクトは、公共施設や公共空間、既存ストックの利活用・運営をテーマに、行政、事業者、市民、専門家が共に関わり、新たな公共のあり方を共に検討する実践型のラボです。
  - 「どのように使うか」「誰が担うか」「どのように支えるか」といった問いを起点に、制度、運営、役割分担の再設計を行います。
  - 具体的には、公共空間の暫定利用、民間との役割分担、共創による運営モデルの試行などを対象とします。
  - 本ラボは、結論を急ぐ場ではなく、小さな実験を通じて学びを蓄積し、将来的な制度設計や事業化へとつなげていくことを目的とします。

- **市民発・共創プロジェクト**
  - 本プロジェクトは、市民や地域団体、事業者が自らテーマを持ち込み、こまつリビングラボを通じてプロジェクト化する仕組みです。
  - 提案されたテーマについては、対話を通じて問いを整理し、関係者をつなぎ、小さく試行する場を提供します。
  - 行政や専門家は、助言や制度との接続を行い、市民主体の取組を後押しする役割を担います。
  - これにより、共創を「参加するもの」から「立ち上げるもの」へと広げ、地域に多様な担い手と活動が生まれる循環の形成を目指します。

2－4. 運営体制の考え方

A）運営体制設計の基本方針

- こまつリビングラボの共創プロジェクトは、未来型図書館づくり、小松駅周辺のまちなか再生、産官学・市民協働による新しい公共のあり方といった複数分野にまたがり、かつ、単年度で完結しない継続的な取組として展開されることを想定しています。
- このため、運営体制については、特定の個人の熱量や能力、あるいは、単一組織の負荷に過度に依存する構造ではなく、役割や機能が整理され、担い手が入れ替わっても継続可能な仕組みとして設計することを基本方針とします。
- 具体的には、以下の機能を整理し、必要に応じて重層的に支える構造を目指します。
  - 全体の方針と制度に接続する機能
  - 共創の場を運営し、対話と活動を促進する機能
  - 分野別に専門性を補完し、プロジェクトを前進させる機能
  - 実務と現場運営を支える機能

B）主体構成（関与する主体と基本的役割）

- 運営主体は、行政、市民、事業者、大学、専門家等の関係主体が、それぞれの立場と役割を担いながら関与する構想を想定します。

① 行政（全体方針・制度との接続）

- 行政は、未来型図書館や小松駅周辺施策等の全体方針、関連計画、予算・事業スキーム等の整合を確保し、共創活動が単発の取組みに終わらず、将来的な施策展開や事業実装につながるための制度・事業との接続点を担います。
- また、共創の場が公正性・透明性を確保しながら運営されるよう、必要に応じて運営状況を確認し、関係主体間の調整を行います。

② 市民・事業者（現場感覚・実践力）

- 市民・事業者は、利用者としての視点や現場の課題感、実践に向けた機動力を持ち込み、共創プロジェクトの中核的な推進力となります。
- その例として、未来型図書館づくりの「Wall of Wishes」では、市民の想いの可視化や参加の裾野拡大が重要となり、小松駅周辺の「みんなのガクショク」や「まちなか交流・滞在案内プロジェクト」では、飲食店、宿泊、体験事業者等とのネットワークがプロジェクト推進の鍵となります。

③ 大学・専門家（知見・第三者的視点）

- 大学、専門家は、リビングラボの理念や方法論、都市再生、エリアマネジメント等の専門的知見を踏まえ、プロジェクト設計や検討の質を高める役割を担います。
- また、関係者の立場や利害が異なる中でも対話を前進させるための「第三者的視点」「問いの整理」「合意形成の補助」を担うことが期待されます。

④ 株式会社こまつ賑わいセンター（実務統括・現場運営）

- ㈱こまつ賑わいセンターは、都市再生推進法人としての立場を活かし、共創プラットフォーム全体の実務統括及び現場運営を担う中核的主体として位置付けます。

- **主体別の基本的役割の整理**

主体	主な役割	位置付け
行政	全体方針・制度・計画との接続	公共性・継続性の担保
市民・事業者	現場感覚・実践力の提供	共創の推進力
大学・専門家	知見・第三者的視点	対話と検討の質の担保
㈱こまつ賑わいセンター	実務統括・現場運営	共創プラットフォームの中核

C）役割設計（機能としての役割分担）

- こまつリビングラボの運営体制は、特定の主体や個人に依存するのではなく、「誰が行うか」ではなく、「どのような機能が必要か」を起点として整理します。
- 共創プロジェクトは、分野横断的かつ継続的に展開されることから、役割を機能単位で整理し、各主体がその機能の一部または全部を担うことで、柔軟かつ継続的な運営を目指します。
- 本業務では、主に以下の 4 つの機能を想定します。
  - 全体コーディネート機能
  - 分野別アドバイザー機能
  - プロジェクト推進機能
  - 運営サポート機能

① 全体コーディネート機能（統括・接続・可視化）

- リビングラボ全体の方針を俯瞰し、共創分野や個別プロジェクトを横断して調整・接続する統括機能です。
- 主な役割は以下のとおりです。
  - 年度ごとの重点テーマの設定やプロジェクト群の整理・優先順位付け
  - 未来型図書館（PFI 運営を含む）及び小松駅周辺施策との接続調整
  - 分野間連携の促進（例. 未来型図書館の学び・活動・交流とまちなかの交流の接続）
  - 成果や学びの可視化（記録、発信、共有）
- この機能については、将来的な運営主体の移行や人材交代があった場合でも継続できるよう、運営ルールや手順を可能な限り、形式知化することが望まれます。
- 機能と担い手の整理

項目	内容
主な機能	全体方針の整理、分野間連携の調整、成果や学びの可視化
主な担い手	行政／㈱こまつ賑わいセンター
対応プロジェクト例	Wall of Wishes、まちなか交流・滞在案内プロジェクト
留意点	属人化を避け、ルール・記録を形式知化

② 分野別アドバイザー機能（専門性・品質担保）

- 各共創分野において、対話の質や検討の深さ、社会実装への接続可能性を高めるための助言機能です。
- その例として、
  - 未来型図書館づくり：図書館情報学、利用者協働、リビングラボ、公共施設運営等
  - 小松駅周辺のまちなか再生：観光、滞在、都市再生、エリアマネジメント等
  - 新しい公共：官民連携、共創型ガバナンス等

といった分野ごとに、専門的知見を有する大学関係者や専門家が助言を行います。

- また、プロジェクトの熟成度に応じて「今は問いを深める段階か／試行の段階か」を整理し、過不足のない進め方を支える役割も期待されます。
- 機能と担い手の整理

分野	想定される専門性	主な役割
未来型図書館づくり	図書館情報学、リビングラボ	利用者協働・運営視点の助言
小松駅周辺のまちなか再生	都市再生、エリアマネジメント	回遊性・滞在性向上の助言
産官学・市民協働による新しい公共のあり方	官民連携、共創型ガバナンス	協働モデルの整理

③ プロジェクト推進機能（実務推進・現場運営）

- 各共創プロジェクトを具体的に動かすための実務推進機能です。
- プロジェクト推進人材は、企画の具体化、関係者調整、現場運営、記録・報告等を担います。
- プロジェクト例に応じた推進人材の役割は以下のとおりです。
  - Wall of Wishes：想いの整理と共有、展示・表現の設計、参加導線づくり
  - みんなのガクショク：空間構成・パートナー企業調整、参加者（学生・企業・地域）マッチング、運営オペレーション
  - まちなか交流・滞在案内プロジェクト：飲食・宿泊・体験事業者の連携調整、情報の一元化、運用・更新体制整備
- プロジェクト推進人材は、行政職員のみで担うものではなく、地域側の担い手を中心に据えることで、機動性と持続性の向上を図ります。
- 機能と担い手の整理

項目	内容
主な機能	企画具体化、関係者調整、現場運営
主な担い手	㈱こまつ賑わいセンター、市民・事業者
対応プロジェクト例	みんなのガクショク、Wall of Wishes、まちなか交流・滞在案内プロジェクト
特徴	行政職員に限定しない柔軟な体制

④ 運営サポート機能（事務・発信・データ管理）

- 共創活動を継続する上で、不可欠な基盤機能です。
  - 参加者管理、会議運営、議事録・記録
  - Web・SNS 等を通じた情報発信
  - 連絡調整、問合せ対応
  - 成果物・ナレッジの蓄積・管理（データベース化）

- 特に、まちなか交流・滞在案内プロジェクトでは、「情報を集める」だけでなく、「更新し続ける」運用が鍵となるため、この機能を体制として確保することが重要です。
- 機能と担い手の整理

項目	内容
主な機能	参加者管理、記録・議事録、情報発信
主な担い手	㈱こまつ賑わいセンター
対応プロジェクト例	みんなのガクショク、Wall of Wishes、まちなか交流・滞在案内プロジェクト
特に重要な点	情報の更新継続運用

D）人材・組織体制の強化に向けた考え方

- こまつリビングラボの共創プロジェクトは、単発のイベント運営ではなく、多様な主体の参画を促し、対話と実践を継続的に積み重ねていく「場の運営」を本質としています。このため共創プラットフォームの運営にあたっては、日常的に人と人、人と活動をつなぎ、関係性を育てていく役割を担う人材の存在が不可欠です。
- 本章で整理したとおり、共創プロジェクトは分野ごとに複数並行して展開され、その内容も、対話、試行、発信、運営といった多岐にわたる業務があります。これらを継続的かつ安定的に推進するためには、従来の事業運営体制に加え、共創の実現を横断的にマネジメントする専門的役割を組織として担う必要があります。
- このため、㈱こまつ賑わいセンターでは、共創プラットフォームの運営を見据え、令和7年度より、コミュニティマネージャー等の配置を含む人材・組織体制の強化を段階的に進めています。コミュニティマネージャーは、
  - 共創プロジェクトにおける参加者同士の関係づくり
  - プロジェクト間の情報共有・連携促進
  - 新たな参加者やテーマの掘り起こし
  - 活動の記録・可視化、情報発信への接続

  などを担い、共創の場が持続的に機能するためのコーディネーターとしての役割を果たすことを想定しています。
- 今後は、こうした人材を中核に据えながら、既存職員や関係主体との役割分担を整理し、プロジェクト推進人材、分野別アドバイザー、行政との連携が有機的に機能する組織体制へと段階的に発展させていくことを目指します。

E）担い手の循環・更新の仕組み

- 運営体制が特定の個人に依存しないためには、担い手の入替や増減があっても継続できるよう、以下の仕組みをあらかじめ組み込むことが重要です。
  - プロジェクトごとの役割定義（責任範囲・判断範囲の明確化）

- 運営手順やノウハウの記録（議事録・運営マニュアル・テンプレート化）
- 「参加→手伝う→担う」へ段階的に関与が深まる導線設計
- ファシリテーター等の育成（未来型図書館やイノベーション・ファシリテーターの人材育成とも接続）

- これにより、共創の担い手が自然に更新される循環を生み、未来型図書館の開館後も持続的に活動が継承される基盤づくりを目指します。

F）未来型図書館（PFI 手法）との接続を見据えた体制上の留意点

- 未来型図書館等複合施設の整備・運営は、PFI 手法となることから、開館後は SPC が施設運営を担う一方、㈱こまつ賑わいセンターがリビングラボの運営を担い、SPC には、同センターとの連携が求められる構造となります。

- このため、運営体制においては、
  - リビングラボで得られた知見・提案を施設運営へ橋渡しするルート
  - 施設側（SPC の運営事業者）と地域側（共創プロジェクト推進主体）の役割分担
  - 連携を形式知化する仕組み（定例協議、共有フォーマット等）

  をあらかじめ想定しておくことが、開館後の連携の実効性を高める上で重要となります。

- 本章で整理した運営体制は、個別プロジェクトの推進にとどまらず、分野間の連携を生み、学びを蓄積し続ける「共創の基盤」として機能することを目指すものです。未来型図書館の開館後においても、共創が施設内外で連鎖し、まち全体へ波及していくための土台として、段階的に体制整備を進めていきます。

第 3 章　共創プロジェクトの実践

3－1. 実践の位置付け

- こまつリビングラボにおける共創プロジェクトの実践は、第2章で整理した共創分野のビジョン及びプロジェクト構想を、開館前の段階から具体的な活動として社会実装していく取組として位置付けられます。こまつリビングラボは、未来型図書館の開館後に初めて本格化するものではなく、開館前から多様な主体が関わり、対話と試行を通じて関係性や知見を蓄積していくことに本質的な意義があります。
- 未来型図書館は、単に新しい機能を備えた公共施設として整備されるものでなく、市民、事業者、大学、行政等が、その機能や使い方、活動のあり方を共に考え、育てていくことを前提とした「成長し続ける公共施設」として構想されています。このため、施設整備と並行して、利用者協働や市民参加のあり方を具体的に試行し、運営の土台となる関係性や方法論を事前に育てていくことが重要となります。
- リビングラボの観点からみると、開館前の実践には大きく3つの意義があります。第一に、将来の利用者や関係主体が構想段階から施設づくりに参加することで、施設に対する当事者意識を育むことです。第二に、対話や試行を通じて、何が求められているのか、どのような参加導線や運営手法が有効なのかを実践的に検証できることです。第三に個々のイベント成果にとどまらず、共創のプロセスそのものを運営スキームとして蓄積していけることです。
- また、本年度の取組においては、㈱こまつ賑わいセンターが、都市再生推進法人としての特性を活かしながら、実務運営、関係者調整、場づくり、情報発信等を担いました。これは、第2章で整理した「実務統括・現場運営」「全体コーディネート」「運営サポート」といった機能を、構想ではなく実践として具体化したものであり、将来の運営主体としての役割を先行的に検証する機会にもなっています。
- 以上から、本年度の実践は、こまつリビングラボの価値を社会に示す初期的成果であると同時に、将来に向けた運営体制、参加の仕組み、情報共有のあり方を磨いていくための基盤形成の段階として位置付けることができます。

3－2. 対話の場の設計の考え方

- こまつリビングラボにおける対話の場は、単に意見を集める場でも、行政施策に対する賛否を問う場でもなく、多様な主体が互いの経験、価値観、関心、課題意識を持ち寄りながら、共に問いを深め、新たな活動やプロジェクトの可能性を見い出していく場として設計しています。これは、リビングラボの中核にある「生活者視点からの共創」及び「使われ方を通じて公共を育てる」という考え方に基づくものです。
- 特に、未来型図書館のような公共施設に関する対話においては、施設の仕様や機能を一方的に説明し、意見を収集するだけでは、利用者協働としては不十分です。重要なのは、参加

者が単なる意見提供者ではなく、未来の利用者、担い手、発信者として位置付けられ、自分たちの言葉や経験を通じて公共施設のあり方を共に編集していくことです。この観点から、こまつリビングラボでは、参加者の主体性が発揮されやすい場の設計を重視しました。

- 未来型図書館に関するリビングラボでは、これまでの市民による司会進行に加え、新たに市民がファシリテーターを担う運営を取り入れました。これは単なる役割分担ではなく、対話の所有権を行政や専門家から市民へとひらく試みとして重要です。利用者協働の視点では、参加者が「呼ばれた人」から「場をつくる人」へと移行することが、継続的な関与や当事者意識の形成に大きく寄与します。市民自身が進行を担うことで、参加者同士の距離が縮まり、発言しやすい雰囲気が生まれ、多様な意見や率直な感覚が引き出されやすくなります。
- 一方、まちなか再生に関するリビングラボでは、ワールドカフェ、フィッシュボール、マグネットテーブルなど複数の対話手法を組み合わせて運営しました。これは、テーマの性質や参加者構成に応じて、対話の深さと広がりを調整するための工夫です。ワールドカフェは多様な参加者同士の偶発的な出会いやアイデアの連鎖を生みやすく、フィッシュボールは議論の中身を全体で共有しながら論点を可視化するのに有効であり、マグネットテーブルは参加者の関心に応じた自発的な移動を促すことで、固定的な役割や立場を超えた参加を生み出します。
- このように、対話の場の設計において重視したのは、「誰もが話せること」だけではありません。むしろ、立場の異なる人が交わる中で、互いの認識の違いに気づき、新たな視点を得て、次の実践につながる問いを持ち帰れることが重要です。共創の場において価値があるのは、必ずもその場で結論が出ることではなく、関係性が育ち、思考が更新され、次の活動の種が生まれることだからです。
- また、対話の質を支える上では、㈱こまつ賑わいセンターによる運営支援も重要な役割を果たしました。対話の場では、テーマ設定、参加者調整、当日の進行補助、記録、事後共有まで含めて一連の運営が必要となります。こうした裏方機能が適切に機能することで、参加者は安心して対話に集中でき、対話の成果も次のプロジェクトへと接続しやすくなります。これは第2章で整理した「運営サポート機能」及び「プロジェクト推進機能」が実践レベルで重要であることを示しています。
- 以上を踏まえると、こまつリビングラボにおける対話の場は、単なるワークショップの開催ではなく、参加者の主体性を引き出し、関係性を育て、将来の公共施設運営やまちづくりに接続する共創基盤として設計されているといえます。

3－3. 対話の実施概要

① 未来型図書館づくりに関するリビングラボ

- 未来型図書館づくりに関する実践として、令和7年度は、大学生及び高校生を対象としたミニリビングラボと市民参加型アートプロジェクト「Wall of Wishes」に関するリビングラボを実施しました。これらは、異なる世代や立場の参加者が未来型図書館との関わり方を考え

る機会として位置付けられ、利用者協働の初期的な実践として重要な意味を持っています。

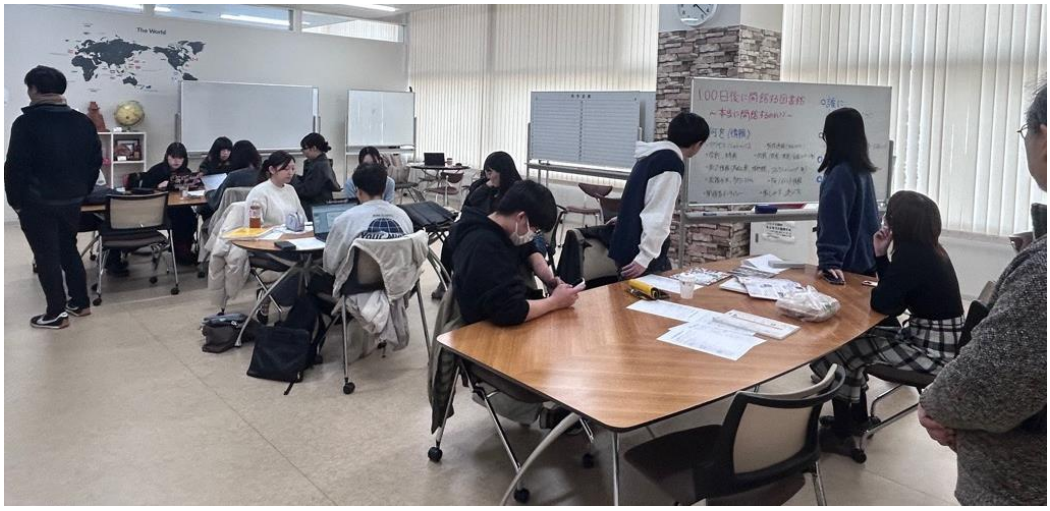
- 大学生を対象としたミニリビングラボでは、「未来型図書館の学生アンバサダーとして、“伝わるPR”を考える」というテーマのもと、未来型図書館の整備計画や施設コンセプトを共有した上で、小学生、中高生、大学生それぞれに対してどのような発信が有効かを検討しました。ここで重要なことは、学生を単なる若年利用者として扱うのではなく、未来型図書館の魅力を社会へ伝える媒介者、共創の発信主体として位置付けた点です。学生によるSNS発信、動画コンテンツ、体験型イベント等の提案は、若い世代の感覚を反映した実践的な視点として、今後の広報や参加促進の方策に資するものと考えられます。

・　第1回ミニリビングラボ（大学生）

日時：令和 7 年 12 月 9 日（火）12:30～14:30
場所：公立小松大学中央キャンパス 2 階
参加者：15 名

・　第2回ミニリビングラボ（大学生）

日時：令和 7 年 12 月 23 日（木）12:30～14:30
場所：公立小松大学中央キャンパス 2 階
参加者：13 名



- 高校生を対象としたミニリビングラボでは、小松市立高校芸術コースの生徒に対して、未来型図書館の計画概要やフェンスアートの趣旨を共有し、今後の参加可能性を探りました。これは、若い世代の創造性や表現力を公共プロジェクトに接続していく試みとして評価できます。特に、芸術コースの生徒に対して、デザインやアートを通じた関わり方を提示したことは、施設利用を超えた関与のあり方、「公共をつくる側」としての参加可能を示した点で意義があります。
  - 第 3 回ミニリビングラボ(高校生)
    日時:令和 7 年 12 月 16 日(木)16:30～17:30
    場所:小松市立高校　芸術コース
    参加者:28 名

- 「Wall of Wishes」に関するリビングラボは、未来型図書館建設予定地の仮設フェンスを「未来へのキャンバス」として捉え、市民の想いや期待を可視化するプロジェクトとして検討しました。仮設という一時的・工事的な要素を、単なる境界や目隠しではなく、市民参加の表現媒体へと転換するこの発想は、利用者協働の観点から非常に重要です。建設中という「まだ利用できない期間」を、市民が未来型図書館との関係を先取りして育てる期間へと変えることができます。

- 第1回のリビングラボでは、フェンスアートのテーマやゾーニングについて議論を行い、道路側では未来型図書館の情報発信や建設プロセスの共有、芦城公園側では市民参加型のアート表現という役割分担が整理されました。これは単なるデザイン検討ではなく、場所の特性に応じて、どのように情報、参加、表現を配置するかという空間編集の試みでもあります。公共空間を「見る場所」と「関わる場所」に編み分ける考え方は、開館後の施設空間運営にも通じる知見といえます。
  - 第1回リビングラボ(フェンスアート)
    日時:令和 8 年 1 月 31 日(土)9:30～12:30
    場所:小松市役所 7 階
    参加者:89名

- 第2回では、色塗り、シール貼り、手形・足形など、子どもから大人まで参加しやすい具体的表現手法や、当日の運営導線が検討されました。ここでのポイントは、アートの完成度そのものよりも、参加のしやすさ、多様な世代が関われる開かれたプロセス、記録や発信への接続が重視されていることです。これは、完成物中心ではなく、参加のプロセスそのものを価値とみなすリビングラボ的な考え方に沿うものです。
  - 第２回リビングラボ（フェンスアート）
    日時：令和８年3月１日（日）13:30～16:30
    場所：小松市役所７階
    参加者：69 名

② 小松駅周辺のまちなか再生に関するリビングラボ

- 小松駅周辺のまちなか再生に関する実践として、「みんなのガクショク」プロジェクトに関するリビングラボを実施しました。本プロジェクトは、「学び」と「食」を軸に、市民、学生、事業者等が交わる場の可能性を探るものであり、第2章で構想された「みんなのガクショク」の初

期的具体化として位置付けられます。

- 第1回では、「小松駅から未来型図書館まで“賑わい”がつながるまちなかとはどのような街か」をテーマに、参加者自身の体験や印象を共有しながら「にぎわい回廊」のイメージを整理しました。ここで重要なことは、賑わいを単なる集客やイベントとしてではなく、人の流れ、滞在、交流、体験の連続性として捉えようとしている点です。未来型図書館を単独施設としてではなく、まちなかとの接続の中で価値を発揮する拠点として捉える視点が、この対話から具体化されています。
  - 第１回リビングラボ（みんなのガクショク）

    日時：令和７年７月 23 日（水）15:00～18:30

    場所：こまつアズスクエア1階

    参加者：32名

- 第2回では、「みんながぶらっと集まりたくなるガクショクとはどのような場所か」をテーマに、気軽さ、居心地、立ち寄りやすさといった視点から、交流拠点としての空間のあり方が議論されました。これは、公共的な居場所やサードプレイスに求められる条件を、生活者の

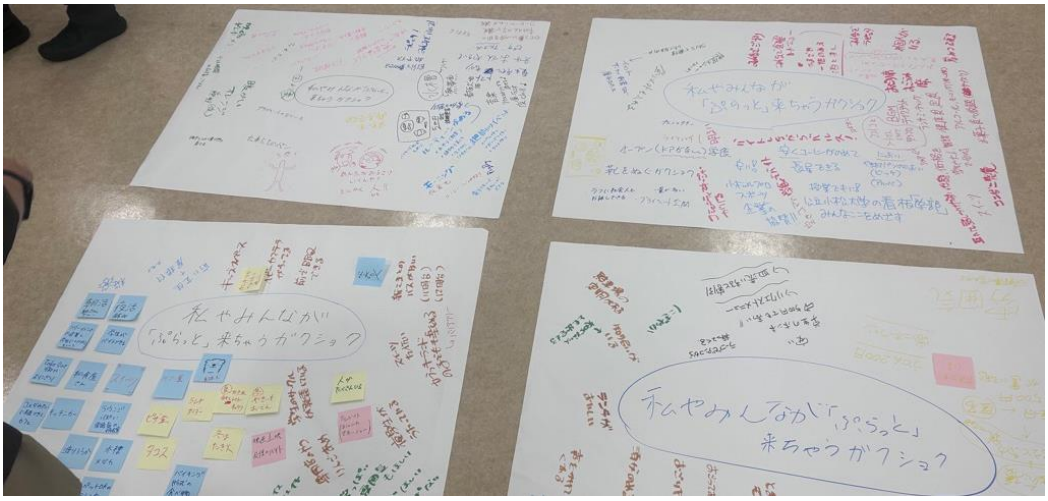
感覚から探る試みといえます。共創の場は、理念だけでは定着せず、日常的に「なんとなく行きたくなる」空気感や使われ方が重要であり、その意味でこの回は、場の機能だけでなく場の質を考える機会となりました。

・　第 2 回リビングラボ（みんなのガクショク）

日時：令和 7 年 8 月 6 日（水）15:00～18:30

場所：こまつアズスクエア1階

参加者：23 名



- 第3回では、「みんなのガクショク」「わたしのガクショク」をテーマとして、未来を想定した新聞記事を作成するワークが行われました。これは単にアイデアを出すだけでなく、実現後の風景や価値を言語化し、共有可能な形へと翻訳する手法として有効です。共創においては、将来像を具体的にイメージできるかどうかが参加の持続性に影響するため、このような想像力を喚起するワークは、構想を共有ビジョンへと変換する役割を果たします。

・　第3回リビングラボ（みんなのガクショク）

日時：令和 7 年 8 月 20 日（水）15:00～18:30

場所：サイエンスヒルズこまつ1階

参加者：26名

- 第4回では、公立小松大学の学生を対象に、メニューや利用スタイルに関するヒアリングを実施し、学生視点からみた魅力や可能性を把握しました。これは、利用者増を具体的に把握しながら、場の実装可能性を高めていくプロセスとして重要です。特に、ガクショクのような拠点は、理念的に魅力があっても、実際の使われ方が伴わなければ継続性を持ちにくいため、生活者の具体的な利用感覚を丁寧に拾うことが不可欠です。
  - 第 2 回リビングラボ(みんなのガクショク)
    日時:令和 7 年 11 月 13 日(木)15:00～16:00
    場所:こまつアズスクエア1階
    参加者:13 名

- 以上の一連の実践は、小松駅周辺を「共創の実践フィールド」として位置付け、小さな試行を通じて、場づくり、関係づくり、運営の可能性を具体化していく取組であったといえます。これは、第5章で示す小松駅周辺先行型の展開シナリオを支える実践的蓄積として評価できます。

3－4. 実践から得られた成果と気づき

- 本年度の実践を通じて、こまつリビングラボにおける共創プロジェクトは、開館前の段階においても、多様な主体が関わる具体的な活動として成立し得ることが確認されました。特に、未来型図書館づくりとまちなか再生という異なるテーマにおいて、それぞれに応じた対話の場を設計し、参加者の関与を引き出せたことは、共創プラットフォームとしての初期的有効性を示す成果といえます。

- 第一の成果は、参加者の当事者意識の形成です。大学生、高校生、市民、事業者など、多様な参加者が未来型図書館やまちなかのあり方について自ら考え、発言し、時には場の進行や表現にも関わることで、「行政がつくるものに意見を述べる」関係から、「自分たちも一緒につくる」関係への移行が見られました。これは、利用者協働の初期段階として極めて重要な変化です。

- 第二の成果は、対話を通じて得られる知見の多様性です。若い世代からは情報発信や参加の新しい発想が、市民からは施設やまちに対する期待や不安、現実的な視点が、事業者や関係者からは運営や連携に対する具体的な示唆が得られました。共創の価値は、一つの正解を見つけることよりも、異なる視点を重ね合わせることで、より豊かな構想に更新していける点にあります。

- 第三の成果は、具体的な場所や空間を対象にした対話の有効性です。「Wall of Wishes」では仮設フェンス、「みんなのガクショク」では駅前拠点という、具体的な場について議論したことで、参加者が自分事として捉えやすく、抽象論に終わらない対話が可能となりました。リビングラボにおいては、実際の場所や生活文脈に根差して対話を行うことが、参加の深ま

りや実践への移行を支える重要な要素であることが改めて確認されました。

- 第四の要素は、㈱こまつ賑わいセンターが、中間支援的な役割を担い得ることが実践的に示された点です。場の企画、関係者調整、当日運営、記録、情報発信までも一体的に支える役割は、今後のリビングラボ運営の中核機能そのものであり、同センターが将来的に担うべき役割の具体像を先行的に示したものといえます。
- 一方で、課題も明確になりました。第一に対話で得られた意見やアイデアを、どのように次の実践や制度、施設運営へと接続していくかという整理の仕組みが今後さらに必要です。共創の場では多様な示唆が生まれますが、それが単発で終わると参加者の期待に応えにくくなります。記録、分類、共有、反映のルートを意識的に整備することが求められます。
- 第二に、継続的参加の導線づくりです。本年度は多様な主体の参加を得ることができた一方で、参加者が一度の参加で終わるのではなく、「知る」「参加する」「手伝う」「担う」へと段階的に関与を深めていける仕組みを整える必要があります。これは第2章で整理された「担い手の循環・更新」の考え方とも接続する重要な課題です。
- 第三に、共創の成果の評価方法です。こまつリビングラボの完成形を示したというよりも、今後の運営スキームを育てていくための基盤形成の段階として位置付けるのが適切です。小さな対話と試行を重ねながら、関係性、知見、運営方法を蓄積していくことこそが、2030 年の開館後に持続的な共創プラットフォームを成立させるための最も重要な準備であると考えられます。

第 4 章　情報発信

4－1. 情報発信の目的

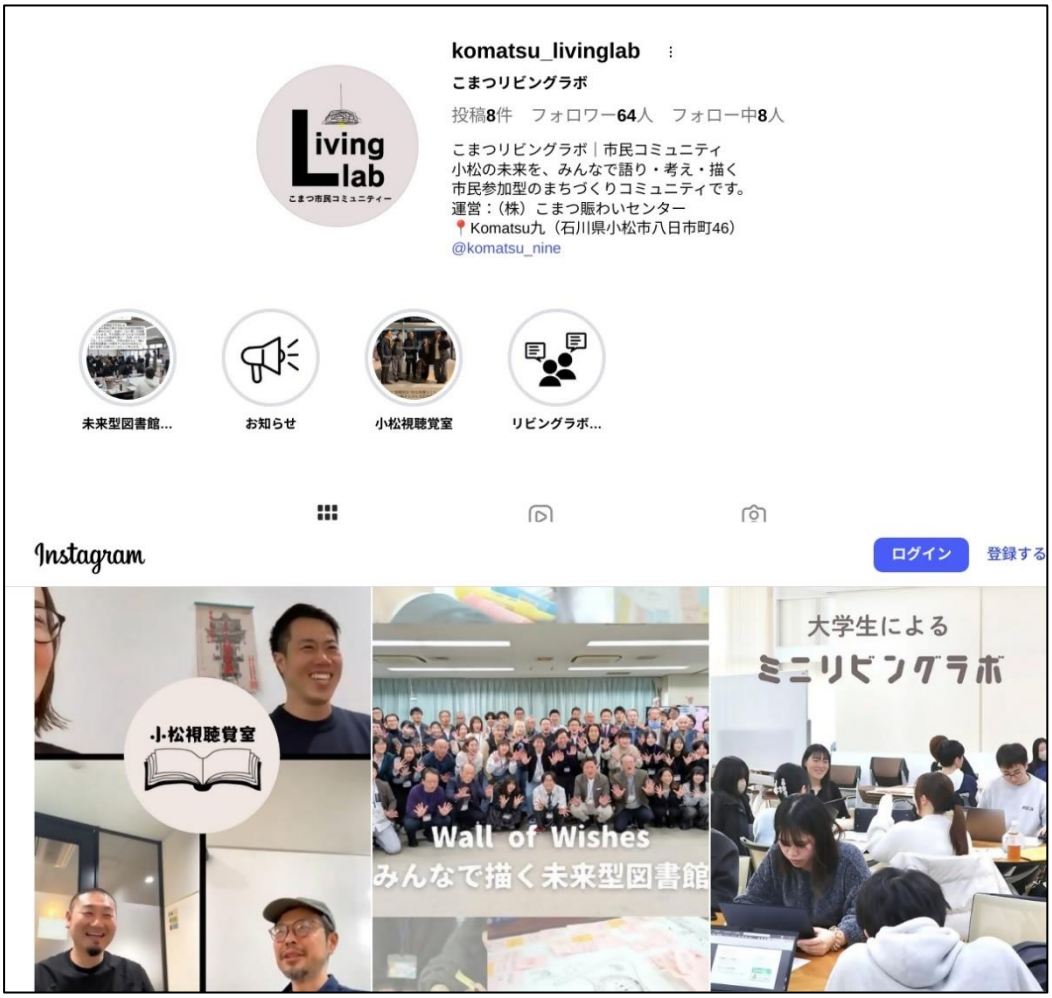
- こまつリビングラボにおける情報発信は、単なる事業周知やイベント告知にとどまるものではなく、共創活動の内容、背景、プロセス、成果を地域にひらき、新たな参加や関係性の広がりを生み出すための基盤機能として位置付けられます。リビングラボにおいては、実践そのものと同様に、その実践をどのように共有し、次の参加へとつなげていくかが極めて重要です。
- 未来型図書館づくりは、施設の整備完了をもって終わるものではなく、市民、事業者、大学、行政等が継続的に関わりながら公共を育てていく取組です。そのため、完成後の施設情報だけでなく、開館前からどのような対話や試行が行われ、どのような思いや学びが蓄積されているのかを可視化していくことが重要です。情報発信は、そのプロセスを社会的に共有可能な資産へと変えていく役割を担います。
- また、情報発信は、市民にとっての「参加の入口」としても重要です。共創活動は、参加している人だけのものになると、閉じたコミュニティに見えやすくなります。だからこそ、何が行われているのか、誰がどのように関わっているのか、自分も関われる余地があるのかを外部に向けて丁寧に伝えることが必要です。情報発信は理解促進だけなく、関心換気、参加促進、当事者意識の醸成に関わる実践でもあります。
- 特に、未来型図書館のような公共施設では、「完成したら利用するもの」という受け身の認識を超えて、「今から関わり、育てていくもの」という認識を市民の間に広げていくことが重要です。その意味で、情報発信は広報ではなく、利用者協働を地域にひらくための装置でもあります。
- 以上を踏まえ、本業務における情報発信は、
  - 活動内容や成果の共有
  - 対話の施行のプロセスの可視化
  - 新たな参加や関係性の創出
  - 未来型図書館づくりの当事者意識の醸成

  を主な目的として実施しました。

4－2. 発信内容と手法

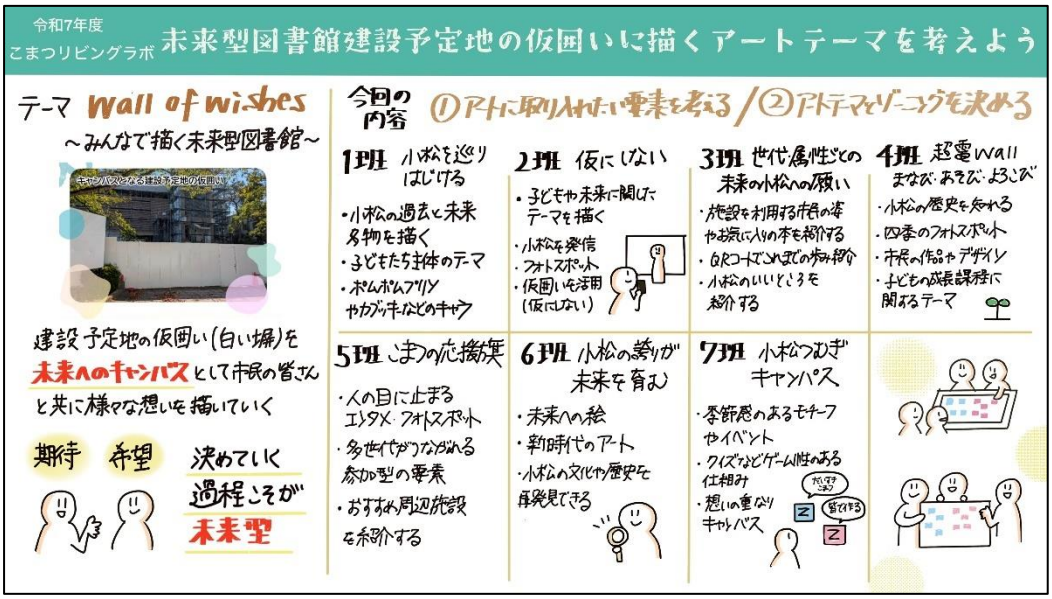
- 本業務では、こまつリビングラボの活動内容や共創プロジェクトの実践を広く共有するため、SNSや note 等のオンライン媒体を活用した情報発信を行いました。これらは単なる告知ツールではなく、活動を多層的に伝えるための媒体として役割分担を持たせながら運用しています。
- SNS では、ワークショップやイベントの開催情報、当日の様子、参加者のコメントや表情などを、写真や短文とともに発信しました。SNS の強みは、即時性と拡散性にあります。活動の

空気感や参加しやすさをリアルタイムに近い形で伝えることで、「何か面白そうなことが起きている」「自分も関われるかもしれない」という感覚を生み出しやすくなります。特に、共創活動の初期段階では、活動の存在自体を可視化し、心理的距離を縮めることが重要であるため、SNS は有効な入口媒体として機能します。



- 一方、note では、活動の背景や目的、ワークショップで交わされた議論、参加者の気づき、そこで生まれた問いなどを、より丁寧に記述しました。共創活動は、結果だけを伝えても伝わりにくく、なぜそのテーマが重要なのか、どのような考え方で進めているのかという文脈の共有が不可欠です。note のような蓄積型媒体は、その文脈を言語化し、後から参照可能な知見として残していく上で有効です。

- このように、SNS を「関心喚起・入口形成」の媒体、note を「背景理解・知見蓄積」の媒体として使い分けることにより、情報発信を単線的な広報から、多層的なコミュニケーションへと展開しています。Web サイトやアーカイブ機能の整備を進め、これらの媒体はさらに相互補完的に機能することが期待されます。
- また、本業務では、より視覚的に理解しやすい手法として、Web ページの構成検討、動画制作、グラフィックレコーディング等についても試行しました。共創活動は、文字情報だけでは伝わりにくい側面があります。場の雰囲気、参加者の関係性、議論の流れ、発言の重なりといった要素は、視覚的・身体的な情報を伴って初めて伝わる部分も大きいためです。
- グラフィックレコーディングは、ワークショップや対話の内容をイラストも交えて整理することで、論点やアイデアを視覚的に共有する手法として有効でありました。これは、参加していない市民にも議論の内容を伝えやすくするだけでなく、参加者自身にとっても「自分たちの議論がどのように整理されたか」を確認する振り返りの装置となります。共創においては、発言や気づきがその場で消えてしまわず、共有可能な形に翻訳されることが、次の活動につながる上で重要です。



- 動画制作についても、活動の様子や参加者の声、表情、空気感を伝える手法として有効性が見込まれます。特に若い世代や、文章より映像の方が接点になりやすい層に対しては、未来

型図書館づくりやリビングラボの活動をより身近に感じてもらう入口となり得ます。今後は、単なる記録映像ではなく、参加を促すストーリー性のある発信へと発展させていくことも考えられます。

- これらの情報発信の実務については、㈱こまつ賑わいセンターが中心となり、活動記録の整理、発信内容の調整、関係主体との連携、媒体の更新等を担いました。これは、第2章で整理された「運営サポート機能」「成果や学びの可視化」といった役割が、情報発信においても重要であることを示しています。共創プラットフォームにおいては、発信は付随的業務ではなく、運営そのものの一部と位置付ける必要があります。
- 情報発信において特に重視したのは、単に「何を実施したか」だけを伝えるのではなく、
  - どのような問いから始まったのか
  - 誰がどのように関わったのか
  - どのような気づきや学びが生まれたのか
  - 次にどのような展開があり得るのか

  を丁寧に伝えることでした。これは、共創のプロセスを単なる記録ではなく、次の参加や対話を促す資源へと転換するために重要な視点です。

4－3. 今後を見据えた情報発信の課題と対応の方向性

① 情報発信の課題

- 本年度の取組みを通じて、SNS や note 等を活用した情報発信は、こまつリビングラボの活動を広く共有し、新たな関心や参加のきっかけを生み出す上で有効であることが確認されました。一方で、今後の継続的な運営を見据えると、情報発信をより戦略的かつ持続的に行うための課題も明らかになっています。
- 第一の課題は、継続性の確保です。共創活動は、単発のイベントの積み重ねではなく、対話と実践が時間をかけて関係し合いながら発展していくものです。そのため、情報発信もイベントごとの断片的な発信にとどめず、活動の連続性や変化の過程が見えるように整理していく必要があります。活動履歴、テーマの変遷、参加者の広がり、得られた成果や次の課題などを継続的に記録し、蓄積していく体制づくりが求められます。
- 第二の課題は、参加につながる導線の明確化です。活動報告だけでは、関心を持った人が次に何をすればよいか分かりにくい場合があります。したがって、情報発信の中に、「誰が参加できるのか」「どのように関われるのか」「どの程度の関わり方が可能なのか」といった情報を明確に組み込み、初参加のハードルを下げる工夫が必要です。利用者協働を広げていくためには、参加を呼びかけるだけでなく、参加の方法を具体的に見せることが重要です。
- 第三の課題は、共創の成果をどう伝えるかです。リビングラボの成果は、事業化、制度化、参加人数の増加といったわかりやすい指標だけでは測れません。関係性が生まれたこと、参加者の見方が変わったこと、次の問いが立ち上がったこと、異なる主体同士の接点ができたことなど、見えにくいが本質的な成果があります。今後は、こうした安定的成果をどのよう

に記録し、発信し、共有していくかが重要になります。

- 第四の課題は、媒体ごとの役割整理とアーカイブ化です。今後、二拠点型の運営やプロジェクト数の増加が進むと情報量も増加します。その際、SNS、note、Web サイト、動画等を場当たり的に運用すると、情報が拡散し、蓄積されにくくなるおそれがあります。したがって、即時性のある発信、背景説明、参加募集、成果アーカイブなど、媒体ごとの役割を整理し、相互に接続した情報発信基盤を構築していくことが必要です。
- 第五の課題は、発信主体の多様化です。現時点では、㈱こまつ賑わいセンターや小松市が中心となって発信実務を担っていますが、今後は、市民、学生、参加団体等が情報発信に関わる仕組みを取り入れていくことが望まれます。共創活動の発信を、運営側からの一方的な広報ではなく、参加者が自ら語り、共有し、広げていく活動へと発展させることで、より多様で厚みのある居層の記録が形成されます。これは、情報発信自体を利用者協働の実践として位置付ける考え方でもあります。

② 今後の対応の方向性

- 今後の対応の方向性としては、まず、情報発信を運営の付属機能ではなく、共創プラットフォームの中核機能として明確に位置付けることが必要です。その上で、記録、編集、発信、蓄積の流れを運営ルールとして整理し、継続的に更新できる体制を整えることが重要です。
- また、市民や学生が記事作成、写真記録、動画出演、SNS発信等に関われる仕組みを段階的に整備することで、発信を「活動の外側から支えるもの」ではなく、「活動の内側から共につくるもの」へと転換していくことが期待されます。
- さらに、未来型図書館の開館を見据えれば、情報発信は単に現状を伝えるだけでなく、将来の施設運営における利用者参加、活動記録、コレクション形成、地域アーカイブのあり方にもつながっていきます。したがって、今の段階から発信と記録のあり方を丁寧に育てていくことは、開館後の施設文化そのものを形づくることにもつながります。
- ㈱こまつ賑わいセンターは、今後も情報発信の実務を担うだけでなく、市民、行政、大学、事業者等をつなぎながら、活動の記録・共有・更新を支えるハブとしての役割を果たしていくことが求められます。これにより、情報発信は、こまつリビングラボの活動を広く伝える手段にとどまらず、市民が未来型図書館づくりやまちづくりを自分事として捉え、主体的に関わるための基盤として、今後さらに強化していく必要があります。

第 5 章　今後の展開方針

－2030 年開館を見据えた共創プラットフォームの段階的展開と運営スキーム－

5－1. 2030 年開館までの全体展開シナリオ

- こまつリビングラボの今後の展開にあたっては、2030 年の未来型図書館の開館を一つの節目としつつ、その準備段階から開館後までを見通した段階的なシナリオ展開として整理することが重要です。未来型図書館を核とする共創プラットフォームは、開館時に完成するものではなく、開館前から対話と実践を重ねながら、運営ノウハウ、関係性、参加の文化を蓄積していくことで、はじめて持続的に機能する基盤となります。
- このため、こまつリビングラボの展開は、まず、小松駅周辺のまちなかを主な実践フィールドとして共創プロジェクトを展開し、試行的実践を通じて運営力やネットワークを蓄積しながら、将来的に未来型図書館が立地する芦城公園周辺へと活動や知見を接続・展開していく流れを基本とします。これは、場所の特性に応じて適切な実践テーマを設定しながら、段階的に共創の密度を高めていく考え方です。
- 小松駅周辺は、ビジネス来訪者、研修参加者、観光客、公立小松大学の学生、企業関係者など、多様な人の流れが生まれやすく、また、飲食、交流、滞在、情報発信といった試行的な取組を立ち上げやすい環境を有しています。このため、同エリアを「共創の実践フィールド」と位置付け、産学官の交流などの小さなプロジェクトを立ち上げ、運営し、振り返り、更新するプロセスを重ねることで、リビングラボとしての運営スキームを実践的に磨いていくことが有効です。
- 一方、芦城公園周辺は、文化施設や教育関連施設が集積する特性を有しており、未来型図書館の開館を機に、多面的機能が融合する「学びの拠点」、交流を通じて共に成長し「未来を育む場」、ワンランク上の暮らしを目指す「みんなの居場所」としての役割・機能が一層充実します。市民参加、学び、知と文化の編集、公共性の高いテーマを扱う共創活動と親和性の高いエリアです。
- 未来型図書館の開館に向けて、小松駅周辺で蓄積してきた実践や関係性を活かしながら、未来型図書館の機能やサービスを共に創り、育てていく共創プロジェクトへと展開を広げていくことが重要となります。同時に、未来型図書館エリアからも周辺やまちなかへの接続・広がりを見据えたプロジェクトへと展開を広げていくことも想定しています。
- こうした時間軸・空間軸の両面から展開を整理することで、未来型図書館の開館を「完成形」とするのではなく、開館後も共創が継続・発展していくための基盤形成を図ります。
- 今後の展開としては、概ね次のような段階を想定します。
  - 第一段階（開館前初期）
    小松駅周辺を中心に、実践フィールドとしての共創プロジェクトを継続・拡大し、運営ノウハウ、関係性、参加の導線を蓄積する段階
  - 第二段階（開館前中期）

未来型図書館づくりに関する利用者協働プロジェクトを強化し、小松駅周辺と芦城公園周辺を接続するプロジェクトを増やしていく段階

・ 第三段階（開館前後）
未来型図書館の開館に合わせ、施設内外の活動、まちなかの実践、情報発信、人材体制を一体化し、二拠点型共創プラットフォームとして本格運用へ移行する段階

・ 第四段階（開館後）
未来型図書館を核としつつ、まちなか全体へ活動を波及させ、共創が継続的に更新される地域の基盤として定着させる段階

5－2. エリア特性を踏まえた共創プロジェクトの展開方針

- 今後の共創プロジェクトは、エリアごとの特性を踏まえながら、役割やテーマを明確にしつつ展開していくことが重要です。こまつリビングラボは一つの理念のもとに運営される一方で、実践の場となるエリアによって、求められるテーマやプロジェクトの性格は異なります。このため、空間ごとの特性を活かしたテーマ設定と役割迫が必要となります。

A）小松駅周辺エリア

- 小松駅周辺では、まちなか再生、夜間を含む飲食・交流、短時間滞在や体験、企業研修・視察との連動、情報案内や回遊促進などを中心に、実践につながる共創プロジェクトを展開していきます。ここでは、機動性、試行性、更新性を重視し、小さく始めて改善を重ねるプロジェクト運営を基本とします。
- このエリアは、生活者だけでなく来訪者や事業者との接点が多く、共創の成果がまちなかの滞在価値や回遊性の向上に直結しやすいという特性があります。そのため、プロジェクトを通じて得られた知見を、将来的な施策展開や民間事業、エリアマネジメントへと接続することも重視します。
- また、小松駅周辺は、こまつリビングラボにとって、「試せる場」であると同時に、「見せる場」でもあります。共創活動の成果や途中経過を地域にひらき、参加を呼び込む入口としての役割も期待されます。この意味で、情報発信と実践が結びついたフィールドとして位置付けることが重要です。

B）芦城公園（未来型図書館）周辺エリア

- 未来型図書館を含む芦城公園エリアでは、学び、知と文化の編集、施設・公園の一体的活用、市民参加、中長期的な社会課題、公共性の高いをテーマを中心とした共創プロジェクトを展開していきます。ここでは、単発的な賑わい創出よりも、利用者協働や公共の担い手に関わる継続的なテーマ設定が重要となります。
- とりわけ、「Wall of Wishes」に代表されるように、市民の想いや問いを丁寧に拾い上げ、それを施設のあり方や運営に反映していく取組は、このエリアにおける象徴的な実践となります。未来型図書館は、開館前から市民が関与し、開館後も使い方や活動が更新され続ける施設であることが望まれるため、このエリアでは、対話、編集、試行、振り返りを繰り返す利用者協働型のプロジェクトを中核に沿える必要があります。
- また、将来的には、小松駅周辺で生まれた実践やネットワーク、情報発信の仕組みが芦城公園周辺エリアへと接続され、両エリアが相互に補完し合う関係を形成することを目指します。小松駅周辺が「実践と接続の場」であるとすれば、芦城公園周辺は「編集と定着の場」として機能することが期待されます。

5－3. 二拠点型リビングラボ運営スキームの構築

- 前述の展開を支えるため、こまつリビングラボの運営は、小松駅周辺と芦城公園周辺の二拠点を持つ運営スキームとして構築していくことが必要です。二拠点型とする意義は、単に活動場所を増やすことではなく、性格の異なる2つのフィールドを接続し、相互に学び合いながら、まち全体に共創を循環させることにあります。
- 小松駅周辺は、
  - 産官学交流を基盤とした共創プロジェクトの実践拠点
  - 事業者や来訪者の接点を持つ場
  - 情報集約・案内・更新のハブ

  として機能していきます。ここでは、まちなかとの接続、事業者との協働、来訪者視点を踏まえた試行的プロジェクトを柔軟に展開し、実践知を蓄積していく役割を担います。
- 一方、芦城公園周辺は、
  - 市民参加の常設的な拠点
  - 市民を中心とした対話・検証・編集を行う場
  - 社会課題や公共性の高いテーマを扱う共創プロジェクトの拠点

  として位置付けます。ここでは、未来型図書館の運営や活動と直結する利用者協働型の実践を深め、公共施設を共に育てる文化を醸成する役割を担います。
- 重要な点は、両拠点はそれぞれが独立して存在するのではなく、運営方針、人材、記録、情報発信、プロジェクト設計を共有しながら、一つの共創プラットフォームとして一体的に運営されることです。小松駅周辺で生まれた小さな実験や関係性が芦城公園周辺での公共性の

高い実践へと接続され、芦城公園で育まれた利用者協働の知見が再びまちなかへの波及していく循環構造をつくることが求められます。

- リビングラボの運営においては、こうした複数拠点間の知見共有と接続が重要です。そのため、今後は、
  - 拠点ごとの役割整理
  - プロジェクト群の全体マネジメント
  - 記録・情報発信の共通フォーマット化
  - 定例的な振り返りと学びの共有

  などを通じて、二拠点を一体的に運営する仕組みを整えていく必要があります。
- 二拠点を一体的に運営することにより、こまつリビングラボは、施設に閉じた活動ではなく、まちなか全体をフィールドとした共創プラットフォームとしての成熟していくことが期待されます。

5－4. 段階的な人材・組織体制の強化方針

- 二拠点型のリビングラボ運営を実現し、共創プロジェクトを継続的に展開していくためには、展開段階に応じた人材・組織体制の強化が不可欠となります。第2章で整理したように、こまつリビングラボの運営には、全体コーディネート、分野別アドバイス、プロジェクト推進、運営サポートといった複数の機能が必要であり、これらを段階的に組織として担えるようにしていく必要があります。
- 未来型図書館開館前の初期段階では、㈱こまつ賑わいセンターを中心に、コミュニティマネージャー等の配置により、共創プロジェクトの実務運営、参加者同士の関係づくり、情報共有、記録・発信を担う体制を整えていきます。コミュニティマネージャーは、単なる事務局ではなく、人と人、人と活動、人と場をつなぐ中核人材として位置付けることが重要です。

- 中期的には、プロジェクト数の増加やテーマの多様化に応じて、役割分担の明確化と専門性の補完が必要となります。例えば、未来型図書館づくり、まちなか再生、新しい公共のあり方といった分野ごとに、大学関係者や外部専門人材によるアドバイザー機能を組み合わせることで、検討の質と社会実装への接続可能性を高めていくことが求められます。
- また、開館前から、市民や学生、事業者が「参加する人」にとどまらず、「手伝う人」「担う人」へと段階的に関与を深められる仕組みを整えることも重要です。共創プラットフォームが持続可能であるためには、運営側と参加側が固定化するのではなく、参加者が徐々に担い手へと移行していく循環構造が必要です。
- 未来型図書館開館後は、プロジェクト数の増加、市民参加の常態化、二拠点の同時運営、SPCとの連携などが想定されることから、人的体制についても、複数名による機能分担や専門性の分化など、一層の強化・充実を図る必要があります。特に、
  - 全体統括
  - コミュニティマネジメント
  - 分野別プロジェクト推進
  - 記録と情報発信
  - 施設運営との接続調整

  といった役割を意識した体制づくりが重要となります。
- さらに、こうした体制を属人的なものにしないためには、運営ルール、判断基準、会議体、共有フォーマット等を形式知化し、担い手の交代があっても継続可能な組織運営の基盤を整えていくことが必要です。

5－5. 持続的な運営に向けた課題と対応の方向性（総括）

- 今後の展開においては、人材、財源、運営ルール、情報発信、施設運営との接続など、いずれについても、単年度や個別事業に依存しない持続的な運営スキームを構築することが求められます。
- 第一に重要な点は、共創プロジェクト運営の標準化です。共創活動は柔軟性が重要である一方、毎回ゼロから立ち上げる運営では継続性が損なわれます。そのため、プロジェクトの立ち上げ手順、役割整理、記録方法、振り返りの方法、参加者フォロー、成果の整理などについて、最低限の共通ルールやテンプレートを整備していくことが必要です。
- 第二に情報発信及び記録の継続的な実施です。第4章で整理したとおり、情報発信は共創活動の外側にある広報ではなく、参加をひらき、学びを蓄積し、次の活動へつなげる基盤機能です。したがって、SNS、note、Web サイト、動画等を活用しながら、活動内容だけでなく、対話のプロセス、成果、課題、参加方法を継続的に発信・記録していく必要があります。
- 第三に財源の複線化です。共創プラットフォームを持続的に運営するためには、行政予算のみに依存しない形で、委託事業、共同事業、助成金、協賛、民間連携等、複数の財源を組み合わせていく視点が必要です。特に、小松駅周辺での実践や情報発信は、民間事業や地域

連携との親和性が高いため、共創活動の公共性を損なわない形で、資金調達の多様化を図っていく必要があります。

- 第四に SPC・小松市・㈱こまつ賑わいセンター間の連携強化です。未来型図書館の整備・運営は PFI 手法としており、開館後は SPC が施設運営を担う一方で、㈱こまつ賑わいセンターがリビングラボ運営の中心を担う構造となります。このため、リビングラボで得られた知見や利用者の声を施設運営へ橋渡しするルート、役割分担、定例協議の仕組み、共有フォーマット等を、開館前から整理しておくことが重要です。

- 第五に、担い手の循環と更新です。共創の担い手が固定化すると、参加の開放性や活動の更新性が失われやすくなります。したがって、「知る」「参加する」「手伝う」「担う」という段階的な参加導線を設計し、市民、学生、事業者等が自然に役割を深めていける仕組みを組み込んでいく必要があります。
- 以上の観点から、こまつリビングラボの持続的な運営に向けては、柔軟な共創活動を支えるための基盤整備を実践と並行して進めていくことが重要です。本章で整理した展開方針は、未来型図書館とまちなかを切り分けて考えるものではなく、2030 年の開館に向けて、時間軸と空間軸の両面から共創を育てていくための道筋を示すものです。小松駅周辺での実践を起点として、芦城公園周辺へと展開を接続しながら、二拠点型の共創プラットフォームとして成熟していくことを目指します。

5－6. 今後のアクション（次年度以降）

次年度以降は、本年度までの実践と検討を踏まえ、こまつリビングラボを「構想段階」から「継続的に運営される共創プラットフォーム」へと発展させていくため、以下のアクションを段階的に進めていくことが必要です。

A）パイロット事業の継続・拡大

- 本年度実施した「Wall of Wishes」「みんなのガクショク」等のパイロット事業については、単年度で完結できるものではなく、継続実施及び内容の更新を通じて、共創プロジェクトとしての成熟を図ります。
- 未来型図書館づくりに関するパイロット事業については、若い世代、市民、関係団体等の参加を広げながら、施設の使い方、テーマ配架、本棚づくり、コレクションハブの検討など、開館後の施設運営に直結する利用者協働型プロジェクトへと発展させていきます。
- 小松駅周辺におけるパイロット事業については、「学び」と「食」を軸とした交流拠点形成に加え、滞在案内、回遊促進、来訪者向け情報編集、事業者連携等へとテーマを広げ、まちなか再生の実践フィールドとしての役割を強化していきます。

B）運営ルールの整備・標準化

- 共創プロジェクトの立ち上げ、運営、記録、振り返り、情報共有に関する基本ルールを整理し、運営マニュアル、会議体の設計、記録様式、役割分担表等の形で標準化を進めます。
- 特に、
  - プロジェクト提案から実施決定までの流れ
  - 関係主体の役割整理
  - 議事録、成果記録、写真・映像記録の扱い
  - 対話後のフォローアップ方法
  - 成果を施設運営や次年度計画へ反映する手順

  などについて、共通フォーマットを整備することが重要です。

C）コミュニティマネジメント機能の強化

- ㈱こまつ賑わいセンターを中心に、コミュニティマネージャー等の配置・育成を進め、参加者同士の関係づくり、担い手の掘り起こし、プロジェクト間の接続、活動記録と発信の連携を担う機能を強化します。
- あわせて、市民、学生、事業者等が段階的に運営補助やファシリテーション、発信などを担える仕組みを整備し、「参加する人」から「担う人」へと移行できる導線づくりを進めます。

D）利用者協働型プロジェクトの体系化

- 未来型図書館づくりに関する共創プロジェクトについては、今後、
  - 施設の使い方の検証
  - 活動プログラムの試行
  - 蔵書やテーマ編集への市民参加
  - 開館後の参加の仕組みの設計

などを体系的に整理し、開館後の運営に接続するプロジェクト群として位置付けます。

- これにより、単発の参加イベントにとどまらず、未来型図書館の機能や文化そのものを共に育てる利用者協働の仕組みを形成していきます。

E）情報発信・アーカイブ機能の整備

- SNS、note、Webサイト、動画等の媒体ごとの役割を整理し、活動の入口、背景説明、成果共有、参加募集、記録蓄積が連動する情報発信基盤を整備します。
- また、対話の記録、グラフィックレコーディング、映像、写真、成果資料等を整理・保存し、将来的には未来型図書館におけるコレクションハブや地域アーカイブ機能とも接続できるよう、記録の蓄積方法を検討します。

F）二拠点間連携の具体化

- 小松駅周辺と芦城公園周辺をつなぐ共創プロジェクトを意識的に企画し、両エリアの役割や学びが相互に行き来する仕組みを具体化します。
- 例えば、小松駅周辺で得られた来訪者視点や滞在・交流の知見を未来型図書館の活動設計へ反映することや、未来型図書館で生まれた学びや文化活動を小松駅周辺のまちなかへと展開することなど、相互接続型の実践を積み上げていくことが重要です。

G）SPCとの連携準備

- 開館後を見据え、SPC及び関係行政部局との情報共有や協議の場を段階的に整備し、リビングラボの成果や利用者視点の知見を施設運営へ反映するための連携ルートを明確化していきます。
- あわせて、将来的な役割分担、定例協議、共有資料の形式、運営上の判断フロー等についても、開館前から整理・検証を進めていくことが必要です。

H）評価と改善の仕組みの導入

- 共創プロジェクトの成果について、参加人数や実施回数だけでなく、
  - 関係主体の広がり
  - 継続参加の状況
  - 次のプロジェクト創出
  - 施設運営や施策への反映状況
  - 参加者の意識変容

  などの観点から評価し、毎年度の振り返りと改善に活かす仕組みを整備します。
- 共創活動は、定量的成果だけでは十分に捉えられないため、定性的な成果も含めた評価の

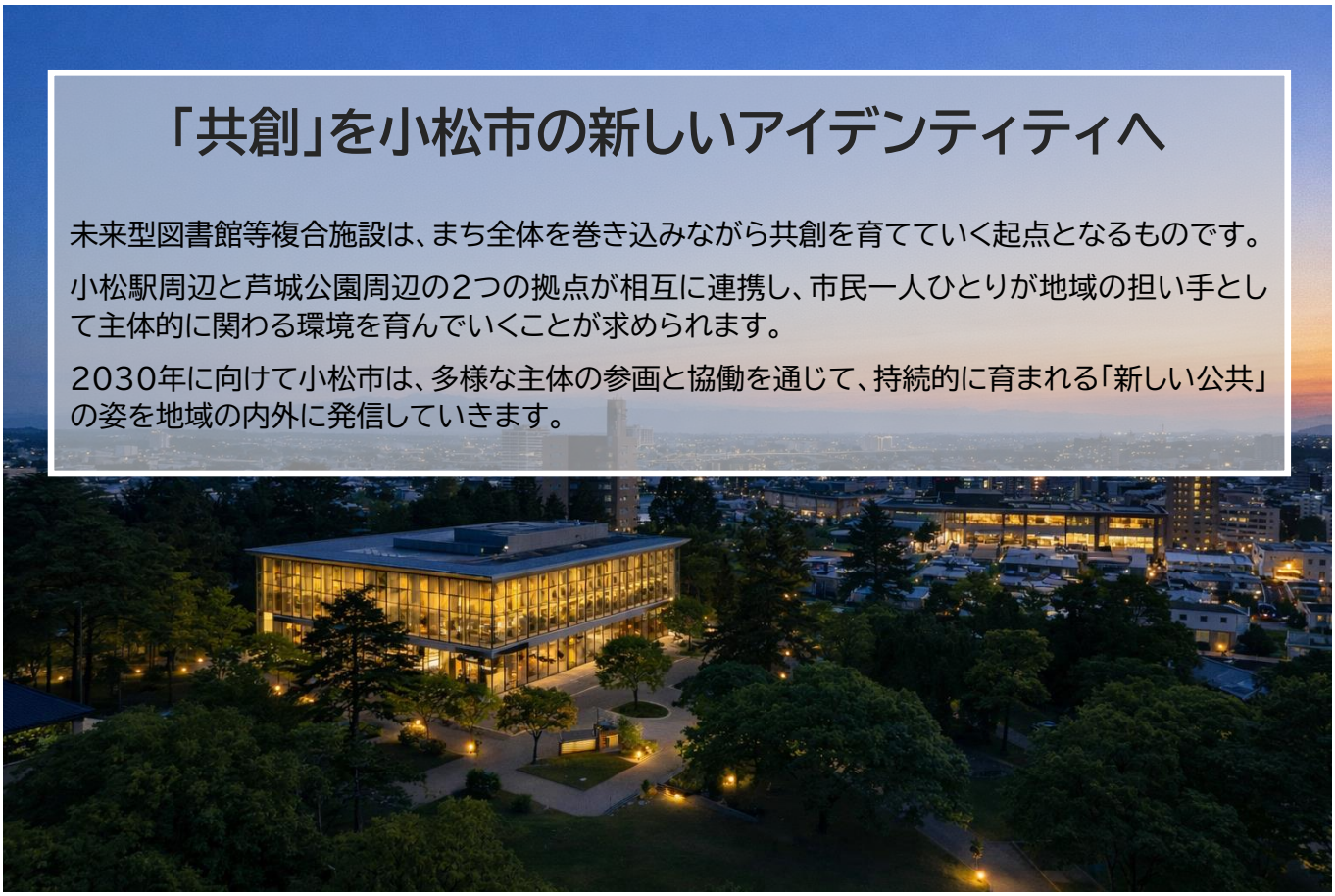
枠組みを持つことが重要です。

I） 財源確保と連携機会の拡充

- 次年度以降は、市の予算のみならず、助成金、共同事業、民間協賛、大学連携等、多様な資源を活用しながら、共創プラットフォームの運営基盤の安定化を図ります。
- また、企業、大学、地域団体、市民活動団体等との連携機会を広げることで、共創の担い手と資源の両面を充実させていくことが必要です。

- こまつリビングラボは、未来型図書館の開館を目標とする取組であると同時に、開館前から対話と実践を重ねながら、小松らしい共創の土台を育てていくプロセスそのものでもあります。今後は、小松駅周辺での実践を起点に、芦城公園周辺へと活動を接続しながら、多様な主体が関わり続ける持続的な共創プラットフォームとして、その基盤形成を着実に進めていきます。

※本報告書に掲載したイメージ図は、生成AIを活用して作成したものです。これらは、構想・イメージの共有を目的とした参考図であり、実際の設計、仕様、景観等を示すものではありません。



共創プラットフォーム「こまつリビングラボ」
運営スキーム構築業務報告書

令和8年3月

小松市未来型図書館づくり推進チーム
株式会社こまつ賑わいセンター